

頭尾勝利するまで闘い抜く。この...

に飛躍するものである。だからこ...

定は共産党よりも優位にたつた...

ら、ブンドの決定には服従しない...

ひき出し、これを結果点として分...

線の下に新たな分派の形成をはか...

塩見君は綱領草案で第二次ブン...

毛教条同時相互止揚の体系を獲...

援し、その先頭に立たねばなら...

い(一〇六頁)というように、...

「労働者の自然発生の闘争を素材...

「計画的」に他ならず、全...

「我々が独自の同心円の党建...

この方針が提起されている。...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

(C) 綱領草案には過去の組織思想が保存されている

(一) 七・六事件に対する開き直り

われわれはプロレタリア綱領草案...

「我々が独自の同心円の党建...

(二) 詭弁にもとづく連赤総括

塩見君が七・六事件を合理化す...

「我々が独自の同心円の党建...

(三) 大衆運動主義的政治のための党

塩見君は綱領草案で第二次ブン...

「我々が独自の同心円の党建...

(D) 綱領草案の組織思想の実践による検証

われわれは塩見君の綱領草案の...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

(三) 七・六事件を導いた「党内党」路線

塩見君の組織思想は一九六九年...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

「我々が独自の同心円の党建...

ユーロコミュニズムとイタリア共産党

序文

一九六七年六月のヨーロッパ共産党労働者会議において、イタリア、スペイン、フランス各共産党は「ユーロコミュニズム」について、それぞれ「この言葉がこれほど普及しているという事実、ヨーロッパ諸国で社会主義の方向に社会を革新する新しい解決策を主張し推進するという志向がいかに深く広がっていることを意味している。」(ヘルリントン)の用語は「(ヘルリントン)の用語はきわめて不適切であり、ユーロコミュニズムなどは存在しないのである」というのは、日本共産党の「ユーロコミュニズム」の思想に含まれていないからである。(カリー)「ユーロコミュニズム」の思想の起源は「フルシチョフによるスターリン批判がなされた一九五六年二月のソ連共産党八回大会で提起された平和共存路線(世界戦争の不可避性の否定、社会主義への平和的移行の定式化、社会主義への多様な道への承認)を受けて一九五六年二月に開かれたイタリア共産党八回大会で決定された構造改革路線にまでさかのぼることができ、(世界政治資料四八二号) 彼らはこのように述べている。『ユーロコミュニズム』によって、先進資本主義諸国の共産党の共通する傾向の存在を公然と明らかにした。今日の宮本一派も含めたこの傾向に対して、われわれは断固とした党派闘争を組織する必要がある。」

「ユーロコミュニズム」の思想の起源は「フルシチョフによるスターリン批判がなされた一九五六年二月のソ連共産党八回大会で提起された平和共存路線(世界戦争の不可避性の否定、社会主義への平和的移行の定式化、社会主義への多様な道への承認)を受けて一九五六年二月に開かれたイタリア共産党八回大会で決定された構造改革路線にまでさかのぼることができ、(世界政治資料四八二号) 彼らはこのように述べている。『ユーロコミュニズム』によって、先進資本主義諸国の共産党の共通する傾向の存在を公然と明らかにした。今日の宮本一派も含めたこの傾向に対して、われわれは断固とした党派闘争を組織する必要がある。」

提起された平和共存路線(世界戦争の不可避性の否定、社会主義への平和的移行の定式化、社会主義への多様な道への承認)を受けて一九五六年二月に開かれたイタリア共産党八回大会で決定された構造改革路線にまでさかのぼることができ、(世界政治資料四八二号) 彼らはこのように述べている。『ユーロコミュニズム』によって、先進資本主義諸国の共産党の共通する傾向の存在を公然と明らかにした。今日の宮本一派も含めたこの傾向に対して、われわれは断固とした党派闘争を組織する必要がある。」

第一章 トリアッティの構造改革の思想

イタリアの修正主義者、その構造改革路線を公然と踏み出したのは、イタリア共産党八回大会(一九五六年)である。すでに大会を前にした一九五六年六月二四日の中央委員会への有名な報告のなかで、トリアッティは「われわれが、ここに社会主義への前進の道が民主的な土台の上に可能であるばかりでなく、議会的形式を利用して可能であると確信する時にも、この修正主義の立場にいくらかの修正を訂正しようとするものである」とは明らかである。(世界政治資料「二」号)と述べて、ブルジョア国家権力とプロレタリア独裁に関するレーニン主義の立場の「訂正」を公言している。われわれは、ここにトリアッティのイタリア共産党八回大会報告をとりあげて批判しておく。

「…前述の立場にいくらかの修正を訂正しようとするものである」とは明らかである。(世界政治資料「二」号)と述べて、ブルジョア国家権力とプロレタリア独裁に関するレーニン主義の立場の「訂正」を公言している。われわれは、ここにトリアッティのイタリア共産党八回大会報告をとりあげて批判しておく。

「…前述の立場にいくらかの修正を訂正しようとするものである」とは明らかである。(世界政治資料「二」号)と述べて、ブルジョア国家権力とプロレタリア独裁に関するレーニン主義の立場の「訂正」を公言している。われわれは、ここにトリアッティのイタリア共産党八回大会報告をとりあげて批判しておく。

(a) 国家独占資本主義の粉飾

トリアッティは、「社会主義へのイタリアの道のために、労働者階級の民主主義政府のために」と題するイタリア共産党八回大会報告のなかで、ブルジョア民主主義的「多様な道」を主張し、自らの改良主義を合理化している。「われわれは、社会主義へのわれわれの道を進むには、イタリアの道を歩まなければならない。」(合同出版「トリアッティ選集」二二〇頁)「問題は、現実のなかで社会主義革命の問題の提起のし方そのものである。」

「単に資本主義制度の密度が異なるだけではない。さらにその構造そのものが異なる。」(同書「二〇七頁」)

トリアッティは、「社会主義は資本主義そのものの内部で客観的に成熟する」と述べ、資本主義の構造の相違を「社会主義の成熟の条件」として、多様な道への根拠としており、ここに構造改革理論の根本的な誤りがある。トリアッティの「社会主義制度を破壊し、社会主義制度を築く」の必然性は、今日の社会における階級闘争の条件と形態の多様性の間

「単に資本主義制度の密度が異なるだけではない。さらにその構造そのものが異なる。」(同書「二〇七頁」)

トリアッティは、「社会主義は資本主義そのものの内部で客観的に成熟する」と述べ、資本主義の構造の相違を「社会主義の成熟の条件」として、多様な道への根拠としており、ここに構造改革理論の根本的な誤りがある。トリアッティの「社会主義制度を破壊し、社会主義制度を築く」の必然性は、今日の社会における階級闘争の条件と形態の多様性の間

第二章 「歴史的妥協」の提唱

(a) 「歴史的妥協」の提唱

一九七三年九月、イタリア共産党書記長ベルリッセルは、「歴史的妥協」を提唱する。トリアッティの「社会主義の成熟の条件」として、多様な道への根拠としており、ここに構造改革理論の根本的な誤りがある。トリアッティの「社会主義制度を破壊し、社会主義制度を築く」の必然性は、今日の社会における階級闘争の条件と形態の多様性の間

「一九七三年九月、イタリア共産党書記長ベルリッセルは、「歴史的妥協」を提唱する。トリアッティの「社会主義の成熟の条件」として、多様な道への根拠としており、ここに構造改革理論の根本的な誤りがある。トリアッティの「社会主義制度を破壊し、社会主義制度を築く」の必然性は、今日の社会における階級闘争の条件と形態の多様性の間

「一九七三年九月、イタリア共産党書記長ベルリッセルは、「歴史的妥協」を提唱する。トリアッティの「社会主義の成熟の条件」として、多様な道への根拠としており、ここに構造改革理論の根本的な誤りがある。トリアッティの「社会主義制度を破壊し、社会主義制度を築く」の必然性は、今日の社会における階級闘争の条件と形態の多様性の間

(b) ブルジョア改良主義の党かレーニン型の党か

トリアッティによるブルジョア改良主義の党か、レーニン型の党かという問題、これは、われわれが先の部分でみてきたトリアッティの「社会主義」の提唱である。カウツキーは「採りに反対する闘争」を中心としたプロレタリアートの闘争を「一つの意識的な単一の闘争に形作り、この闘争の自然発生性にも目標を定めよう。」(合同出版「トリアッティ選集」二二〇頁)

これは、われわれが先の部分でみてきたトリアッティの「社会主義」の提唱である。カウツキーは「採りに反対する闘争」を中心としたプロレタリアートの闘争を「一つの意識的な単一の闘争に形作り、この闘争の自然発生性にも目標を定めよう。」(合同出版「トリアッティ選集」二二〇頁)

これは、われわれが先の部分でみてきたトリアッティの「社会主義」の提唱である。カウツキーは「採りに反対する闘争」を中心としたプロレタリアートの闘争を「一つの意識的な単一の闘争に形作り、この闘争の自然発生性にも目標を定めよう。」(合同出版「トリアッティ選集」二二〇頁)

(b) ブルジョア改良主義の党かレーニン型の党か

トリアッティによるブルジョア改良主義の党か、レーニン型の党かという問題、これは、われわれが先の部分でみてきたトリアッティの「社会主義」の提唱である。カウツキーは「採りに反対する闘争」を中心としたプロレタリアートの闘争を「一つの意識的な単一の闘争に形作り、この闘争の自然発生性にも目標を定めよう。」(合同出版「トリアッティ選集」二二〇頁)

これは、われわれが先の部分でみてきたトリアッティの「社会主義」の提唱である。カウツキーは「採りに反対する闘争」を中心としたプロレタリアートの闘争を「一つの意識的な単一の闘争に形作り、この闘争の自然発生性にも目標を定めよう。」(合同出版「トリアッティ選集」二二〇頁)

これは、われわれが先の部分でみてきたトリアッティの「社会主義」の提唱である。カウツキーは「採りに反対する闘争」を中心としたプロレタリアートの闘争を「一つの意識的な単一の闘争に形作り、この闘争の自然発生性にも目標を定めよう。」(合同出版「トリアッティ選集」二二〇頁)

ければならない。どこからか？言わねばならない。どこからか？言わねばならない。どこからか？言わねばならない。

ブルジョア的「歴史的妥協」は、ブルジョア的「歴史的妥協」は、ブルジョア的「歴史的妥協」は、ブルジョア的「歴史的妥協」は、ブルジョア的「歴史的妥協」は、

争、武装蜂起に転化されず、ブルジョア的改良主義者によって... 争、武装蜂起に転化されず、ブルジョア的改良主義者によって...

労働者階級の分裂に基礎を置く... 労働者階級の分裂に基礎を置く... 労働者階級の分裂に基礎を置く...

ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者...

ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者...

ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者...

ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者...

ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者...

ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者...

ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者...

ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者...

ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者...

ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者...

ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者...

ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者...

ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者...

ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者...

ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者...

ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者...

(b) 階級協調主義の泥沼

ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者...

ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者...

ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者...

ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者...

ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者...

ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者...

ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者...

ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者...

(c) 社会帝国主義者の本性の露呈

ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者...

ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者... ブルジョア的改良主義者...

くりかえされてきた、共同生活の基礎的な規則をまもる習慣、暴力がなくても、強制がなくても、隷屬関係がなくても、国家とよばれる特殊な強制機関がなくても、これらの規則をまもる習慣を除くに身をつけるであろうということがそれである。(「国家と革命」)

このようにレーニン、ブルジョア民主主義、プロレタリア民主主義、民主主義の死滅というように、民主主義の問題を歴史的、具体的に考察し、その特徴をえがき出した変化はなによりも、物質的諸生産関係の変化に規定されている。

8 国家死滅の経済的基礎について

マルクスが「ゴータ綱領批判」で与えた将来の社会の経済的分析は、すくなくとも、単純である。マルクスは「ゴータ綱領草案」のなかにある「労働収益」というあいまいな言葉を批判し、それを労働の生産物という意味におきかえ、社会の総生産物が社会においてどのように分配されるかという問題に關して、次のように述べている。

「さて、この社会的総生産物からつぎのものが控除されねばならぬ。

第一に、消耗した生産手段を入れかえるための補償分。

第二に、生産を拡張するための追加分。

第三に、事故や自然災害による混乱などに必要な予備資金あるいは保険基金。

「労働の全収益」からこれらを控除することは、もろくに経済的に必要なことである。その大きさは手もちの手段と力によつてまたその一部は確率計算によつて決定されるべきものであつて、公正なことから算定できるものでは決してない。

総生産物の残りの部分は、消費手段として使われねばならぬ。それが個人的に分配されるまえに、そのなかから、つぎのものが差し引かれる。

第一に、直接に生産に属さない一般的な行政費用。

この部分は、今日の社会に比べると最初からきわめていぢりぢりである。レーニンはマルクスが「ゴータ綱領批判」で明らかにした将来の社会の経済的分析に依拠して、「共産主義社会の将来の国家制度」の問題を「ほんとうにならざる限り、民主主義の死滅」として考察している。

今日問題となっているソビエト及び東欧諸国での人権問題は、ブルジョア民主主義、プロレタリア民主主義、及び民主主義の死滅の問題と、民主主義の三つの内容との関連で考察される必要がある。そのうえでソ連及び東欧諸国の共産党の社会帝国主義への転化とそれ

にもとづくプロレタリアートの独裁の放棄が、ソ連及び東欧のプロレタリアート人民に対する民主主義の制限としてあらわれ、これを「見てもよむべき」である。つまりプロレタリアートの独裁が行われていないから、プロレタリアート人民に対する民主主義の制限が行なわれているという見地は誤つており、実際には、プロレタリアートの独裁の放棄が、プロレタリアート人民の民主主義を制限しているのである。

生産物についてやされた労働は、これらの生産物の価値として、すなわちその生産物が有するひとつの物的属性としてあらわれ、その労働は、もはや間接にはなく、直接に、総労働の諸構成部分として存在するからである。「労働収益」ということは今日でさえ意味があいまいだから使ふべきではないことばなのだが、こうしてまづ、この意味を失つてしまふ。

ここで問題になっているのは、それ自身の基礎の上に発展した共産主義社会ではなく、反対に、資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会である。したがつて、この共産主義社会は、あらゆる点で、経済的にも道徳的にも精神的にも、それが生まれつゝの母胎である古い社会の母胎をまた身に付けている。それゆゑ、個々の生産者は、彼が社会にあつたときと同じだけのものを——ある諸控除をすまふたあと——とりもつて、自分が支配している労働を社会的生産物の一部分とする。したがつて、自分支配して所有する労働生産物が商品となり、価値の形態を受けとる。各生産者の労働が、そのままで社会的労働にならねばならぬから、労働のうちに、そのうち、彼が労働のうちの彼の持ち分を、共同の基金のなかから、この社会にけりしはしない。同様にこの社会では

「ゴータ綱領批判」のなかで、マルクスは「労働収益」というあいまいな言葉を批判し、それを労働の生産物という意味におきかえ、社会の総生産物が社会においてどのように分配されるかという問題に關して、次のように述べている。

「さて、この社会的総生産物からつぎのものが控除されねばならぬ。

第一に、消耗した生産手段を入れかえるための補償分。

第二に、生産を拡張するための追加分。

第三に、事故や自然災害による混乱などに必要な予備資金あるいは保険基金。

「労働の全収益」からこれらを控除することは、もろくに経済的に必要なことである。その大きさは手もちの手段と力によつてまたその一部は確率計算によつて決定されるべきものであつて、公正なことから算定できるものでは決してない。

総生産物の残りの部分は、消費手段として使われねばならぬ。それが個人的に分配されるまえに、そのなかから、つぎのものが差し引かれる。

第一に、直接に生産に属さない一般的な行政費用。

この部分は、今日の社会に比べると最初からきわめていぢりぢりである。レーニンはマルクスが「ゴータ綱領批判」で明らかにした将来の社会の経済的分析に依拠して、「共産主義社会の将来の国家制度」の問題を「ほんとうにならざる限り、民主主義の死滅」として考察している。

今日問題となっているソビエト及び東欧諸国での人権問題は、ブルジョア民主主義、プロレタリア民主主義、及び民主主義の死滅の問題と、民主主義の三つの内容との関連で考察される必要がある。そのうえでソ連及び東欧諸国の共産党の社会帝国主義への転化とそれ

「ゴータ綱領批判」のなかで、マルクスは「労働収益」というあいまいな言葉を批判し、それを労働の生産物という意味におきかえ、社会の総生産物が社会においてどのように分配されるかという問題に關して、次のように述べている。

「さて、この社会的総生産物からつぎのものが控除されねばならぬ。

第一に、消耗した生産手段を入れかえるための補償分。

第二に、生産を拡張するための追加分。

第三に、事故や自然災害による混乱などに必要な予備資金あるいは保険基金。

「労働の全収益」からこれらを控除することは、もろくに経済的に必要なことである。その大きさは手もちの手段と力によつてまたその一部は確率計算によつて決定されるべきものであつて、公正なことから算定できるものでは決してない。

総生産物の残りの部分は、消費手段として使われねばならぬ。それが個人的に分配されるまえに、そのなかから、つぎのものが差し引かれる。

第一に、直接に生産に属さない一般的な行政費用。

この部分は、今日の社会に比べると最初からきわめていぢりぢりである。レーニンはマルクスが「ゴータ綱領批判」で明らかにした将来の社会の経済的分析に依拠して、「共産主義社会の将来の国家制度」の問題を「ほんとうにならざる限り、民主主義の死滅」として考察している。

今日問題となっているソビエト及び東欧諸国での人権問題は、ブルジョア民主主義、プロレタリア民主主義、及び民主主義の死滅の問題と、民主主義の三つの内容との関連で考察される必要がある。そのうえでソ連及び東欧諸国の共産党の社会帝国主義への転化とそれ

「ゴータ綱領批判」のなかで、マルクスは「労働収益」というあいまいな言葉を批判し、それを労働の生産物という意味におきかえ、社会の総生産物が社会においてどのように分配されるかという問題に關して、次のように述べている。

「さて、この社会的総生産物からつぎのものが控除されねばならぬ。

第一に、消耗した生産手段を入れかえるための補償分。

第二に、生産を拡張するための追加分。

第三に、事故や自然災害による混乱などに必要な予備資金あるいは保険基金。

「労働の全収益」からこれらを控除することは、もろくに経済的に必要なことである。その大きさは手もちの手段と力によつてまたその一部は確率計算によつて決定されるべきものであつて、公正なことから算定できるものでは決してない。

総生産物の残りの部分は、消費手段として使われねばならぬ。それが個人的に分配されるまえに、そのなかから、つぎのものが差し引かれる。

第一に、直接に生産に属さない一般的な行政費用。

この部分は、今日の社会に比べると最初からきわめていぢりぢりである。レーニンはマルクスが「ゴータ綱領批判」で明らかにした将来の社会の経済的分析に依拠して、「共産主義社会の将来の国家制度」の問題を「ほんとうにならざる限り、民主主義の死滅」として考察している。

今日問題となっているソビエト及び東欧諸国での人権問題は、ブルジョア民主主義、プロレタリア民主主義、及び民主主義の死滅の問題と、民主主義の三つの内容との関連で考察される必要がある。そのうえでソ連及び東欧諸国の共産党の社会帝国主義への転化とそれ

9 ブルジョア民主主義・純粋民主主義への信奉に対する批判

ブルジョア社会においては、個人の労働が社会的労働となるためには、それが商品形態をとらねばならない。そうすることによって、個人の労働は、その商品形態が示す社会的平均労働時間によって評価され、そして社会的労働に対する個人の分け前の分量に於いての権利が決定される。だからこの場合、等価物としての交換という平均として成立しているだけで、個々の場合には等価物の交換とはなっていないのである。こうした比較すれば、生れたばかりの共産主義社会における交換は原則と実態とが一致しており、この点で商品交換より進歩している。とはいへ、この権利は生産者の権利を労働という等しい尺度で計るものであり、商品価値が抽象的労働の分量によって計られ、社会的労働に對する個人の権利が決められることと根本的な差異はなく、原則的にはブルジョアの権利であつて、そこにはまだあるブルジョアの制約をまぬがれることはできない。

レーニンは、マルクスが示した共産主義社会の第一段階における経済的分析にもとづき、その土台との関係で予想される未来社会の国家制度について分析し、「国家制度は共産主義社会ではどんなふうになるのか……それは今日

ブルジョア社会においては、個人の労働が社会的労働となるためには、それが商品形態をとらねばならない。そうすることによって、個人の労働は、その商品形態が示す社会的平均労働時間によって評価され、そして社会的労働に対する個人の分け前の分量に於いての権利が決定される。だからこの場合、等価物としての交換という平均として成立しているだけで、個々の場合には等価物の交換とはなっていないのである。こうした比較すれば、生れたばかりの共産主義社会における交換は原則と実態とが一致しており、この点で商品交換より進歩している。とはいへ、この権利は生産者の権利を労働という等しい尺度で計るものであり、商品価値が抽象的労働の分量によって計られ、社会的労働に對する個人の権利が決められることと根本的な差異はなく、原則的にはブルジョアの権利であつて、そこにはまだあるブルジョアの制約をまぬがれることはできない。

レーニンは、マルクスが示した共産主義社会の第一段階における経済的分析にもとづき、その土台との関係で予想される未来社会の国家制度について分析し、「国家制度は共産主義社会ではどんなふうになるのか……それは今日

ブルジョア社会においては、個人の労働が社会的労働となるためには、それが商品形態をとらねばならない。そうすることによって、個人の労働は、その商品形態が示す社会的平均労働時間によって評価され、そして社会的労働に対する個人の分け前の分量に於いての権利が決定される。だからこの場合、等価物としての交換という平均として成立しているだけで、個々の場合には等価物の交換とはなっていないのである。こうした比較すれば、生れたばかりの共産主義社会における交換は原則と実態とが一致しており、この点で商品交換より進歩している。とはいへ、この権利は生産者の権利を労働という等しい尺度で計るものであり、商品価値が抽象的労働の分量によって計られ、社会的労働に對する個人の権利が決められることと根本的な差異はなく、原則的にはブルジョアの権利であつて、そこにはまだあるブルジョアの制約をまぬがれることはできない。

レーニンは、マルクスが示した共産主義社会の第一段階における経済的分析にもとづき、その土台との関係で予想される未来社会の国家制度について分析し、「国家制度は共産主義社会ではどんなふうになるのか……それは今日

ブルジョア社会においては、個人の労働が社会的労働となるためには、それが商品形態をとらねばならない。そうすることによって、個人の労働は、その商品形態が示す社会的平均労働時間によって評価され、そして社会的労働に対する個人の分け前の分量に於いての権利が決定される。だからこの場合、等価物としての交換という平均として成立しているだけで、個々の場合には等価物の交換とはなっていないのである。こうした比較すれば、生れたばかりの共産主義社会における交換は原則と実態とが一致しており、この点で商品交換より進歩している。とはいへ、この権利は生産者の権利を労働という等しい尺度で計るものであり、商品価値が抽象的労働の分量によって計られ、社会的労働に對する個人の権利が決められることと根本的な差異はなく、原則的にはブルジョアの権利であつて、そこにはまだあるブルジョアの制約をまぬがれることはできない。

レーニンは、マルクスが示した共産主義社会の第一段階における経済的分析にもとづき、その土台との関係で予想される未来社会の国家制度について分析し、「国家制度は共産主義社会ではどんなふうになるのか……それは今日

第一次RGの戦闘の教訓について

編集部註記

一九七五年五月二日大阪地裁で行われた第一次RG公判における浜田同志の冒頭陳述のうらから、第一次RGの結核について述べられた部分を抄録する。これは、第一次RG以来のRG結核の視点が積極的に提起され、我々の党建設の発展の中で位置づけられている点で、今日我々が必ず継承しなければならない党文献の一つである。意義をもちたろう。

「IRG」建軍の思想

「世界革命戦争が世界同時革命の具体的な形態である以上、これを荷う世界革命は共産主義第一の下のみ形成される。……世界革命の形成は既に現時点からなされなければならない。」(九回大会) 世界革命下の世界革命の質をもつて軍事組織が構築することなしにはプロレタリア世界革命が敗北せざるを得ない時代として現代はあること、逆に、党が組織する暴力を世界プロレタリア独裁・世界同時革命の質をもつて具現化させることを通じてしか世界革命へ飛躍しぬけないこと、我々が党の革命なしに存在しないこと、党と軍は世界プロレタリア独裁の「政治性、組織性、思想性」を体現しなければならぬこと(岡田論文)——これが、RGの「建軍の思想」である。

今日に至るまで、日本階級闘争は、中国共産党の人民戦争、三大陸人民の(六〇年代以降、貧農、労働者を代表するものとして発展した)民族解放戦争と米帝を中心とする帝国主義列強の侵略、反革命に対する過小評価におちいって進もうとしない段階で、赤軍派が大量の自然発生性を思想的に結晶させた「過渡期世界に於ける高次の自発性」の理論のもとで、第二次階級闘争を克服する努力を続けながら、国際非合法法として自らをかたちづこうとする。ことよって、第二次共産同の世界同時革命の主張を継承発展させようとしているのである。(「赤報」十三号)

「第二次共産同が、戦術的戦闘の「世界戦略」という階級闘争に対する態度をとったのは一つの帰結であった。帝国主義の「なしくずし」ブロック化の政治表現たる「なしくずし」ファシズムと現実たる「なしくずし」ファシズムと、いったい、いまい、いまいの問題は、ソヴェト主義の傾向もいまい、国際的階級闘争に対する帝国主義の態度を今日克服できない。彼らは「政府中枢」占拠を目的としたのであり、反政府闘争の極限に武装蜂起を考えたのである。しかし、パリ・コムニオン経験からしても、プロレタリアートはブルジョア国家権力を利用して自らの権力とすることはできず、ブルジョア国家権力をこたく粉砕してプロレタリアート独裁権力を樹立しなければならぬ。このマルクス主義の原則からいって、「占拠」を目的とすることはできない。ましてや「占拠」によって政治危機が生れ人民の決起を呼び起されるなどすることはできない。武装蜂起の諸原則はこうした急進民主主義の戦術観から生れることはいない。

「第二次共産同の階級闘争を克服するものではない。六九年以降の日本階級闘争の発展は端緒的な革命戦争の地平への発展であり、第二次共産同をして革命戦争をめぐって権力問題、戦術、組織のすべての分野にわたって限界に上らせたのである。このように、革命戦争に用意のある非合法法建設の問題が日程に上ったのであり、帝国主義者が破防法適用にふみきはあえない。」

「RG建設は、当時の階級闘争を克服するものではない。六九年以降の日本階級闘争の発展は端緒的な革命戦争の地平への発展であり、第二次共産同をして革命戦争をめぐって権力問題、戦術、組織のすべての分野にわたって限界に上らせたのである。このように、革命戦争に用意のある非合法法建設の問題が日程に上ったのであり、帝国主義者が破防法適用にふみきはあえない。」

「恒常的武装闘争の戦術」は、権力と階級闘争の関係を規定するものであり、階級闘争の極限に武装蜂起を考えたのである。しかし、パリ・コムニオン経験からしても、プロレタリアートはブルジョア国家権力を利用して自らの権力とすることはできず、ブルジョア国家権力をこたく粉砕してプロレタリアート独裁権力を樹立しなければならぬ。このマルクス主義の原則からいって、「占拠」を目的とすることはできない。ましてや「占拠」によって政治危機が生れ人民の決起を呼び起されるなどすることはできない。武装蜂起の諸原則はこうした急進民主主義の戦術観から生れることはいない。

「恒常的武装闘争の戦術」は、権力と階級闘争の関係を規定するものであり、階級闘争の極限に武装蜂起を考えたのである。しかし、パリ・コムニオン経験からしても、プロレタリアートはブルジョア国家権力を利用して自らの権力とすることはできず、ブルジョア国家権力をこたく粉砕してプロレタリアート独裁権力を樹立しなければならぬ。このマルクス主義の原則からいって、「占拠」を目的とすることはできない。ましてや「占拠」によって政治危機が生れ人民の決起を呼び起されるなどすることはできない。武装蜂起の諸原則はこうした急進民主主義の戦術観から生れることはいない。

「恒常的武装闘争の戦術」は、権力と階級闘争の関係を規定するものであり、階級闘争の極限に武装蜂起を考えたのである。しかし、パリ・コムニオン経験からしても、プロレタリアートはブルジョア国家権力を利用して自らの権力とすることはできず、ブルジョア国家権力をこたく粉砕してプロレタリアート独裁権力を樹立しなければならぬ。このマルクス主義の原則からいって、「占拠」を目的とすることはできない。ましてや「占拠」によって政治危機が生れ人民の決起を呼び起されるなどすることはできない。武装蜂起の諸原則はこうした急進民主主義の戦術観から生れることはいない。

「恒常的武装闘争の戦術」は、権力と階級闘争の関係を規定するものであり、階級闘争の極限に武装蜂起を考えたのである。しかし、パリ・コムニオン経験からしても、プロレタリアートはブルジョア国家権力を利用して自らの権力とすることはできず、ブルジョア国家権力をこたく粉砕してプロレタリアート独裁権力を樹立しなければならぬ。このマルクス主義の原則からいって、「占拠」を目的とすることはできない。ましてや「占拠」によって政治危機が生れ人民の決起を呼び起されるなどすることはできない。武装蜂起の諸原則はこうした急進民主主義の戦術観から生れることはいない。

「恒常的武装闘争の戦術」は、権力と階級闘争の関係を規定するものであり、階級闘争の極限に武装蜂起を考えたのである。しかし、パリ・コムニオン経験からしても、プロレタリアートはブルジョア国家権力を利用して自らの権力とすることはできず、ブルジョア国家権力をこたく粉砕してプロレタリアート独裁権力を樹立しなければならぬ。このマルクス主義の原則からいって、「占拠」を目的とすることはできない。ましてや「占拠」によって政治危機が生れ人民の決起を呼び起されるなどすることはできない。武装蜂起の諸原則はこうした急進民主主義の戦術観から生れることはいない。

「恒常的武装闘争の戦術」は、権力と階級闘争の関係を規定するものであり、階級闘争の極限に武装蜂起を考えたのである。しかし、パリ・コムニオン経験からしても、プロレタリアートはブルジョア国家権力を利用して自らの権力とすることはできず、ブルジョア国家権力をこたく粉砕してプロレタリアート独裁権力を樹立しなければならぬ。このマルクス主義の原則からいって、「占拠」を目的とすることはできない。ましてや「占拠」によって政治危機が生れ人民の決起を呼び起されるなどすることはできない。武装蜂起の諸原則はこうした急進民主主義の戦術観から生れることはいない。

「恒常的武装闘争の戦術」は、権力と階級闘争の関係を規定するものであり、階級闘争の極限に武装蜂起を考えたのである。しかし、パリ・コムニオン経験からしても、プロレタリアートはブルジョア国家権力を利用して自らの権力とすることはできず、ブルジョア国家権力をこたく粉砕してプロレタリアート独裁権力を樹立しなければならぬ。このマルクス主義の原則からいって、「占拠」を目的とすることはできない。ましてや「占拠」によって政治危機が生れ人民の決起を呼び起されるなどすることはできない。武装蜂起の諸原則はこうした急進民主主義の戦術観から生れることはいない。

「恒常的武装闘争の戦術」は、権力と階級闘争の関係を規定するものであり、階級闘争の極限に武装蜂起を考えたのである。しかし、パリ・コムニオン経験からしても、プロレタリアートはブルジョア国家権力を利用して自らの権力とすることはできず、ブルジョア国家権力をこたく粉砕してプロレタリアート独裁権力を樹立しなければならぬ。このマルクス主義の原則からいって、「占拠」を目的とすることはできない。ましてや「占拠」によって政治危機が生れ人民の決起を呼び起されるなどすることはできない。武装蜂起の諸原則はこうした急進民主主義の戦術観から生れることはいない。

「恒常的武装闘争の戦術」は、権力と階級闘争の関係を規定するものであり、階級闘争の極限に武装蜂起を考えたのである。しかし、パリ・コムニオン経験からしても、プロレタリアートはブルジョア国家権力を利用して自らの権力とすることはできず、ブルジョア国家権力をこたく粉砕してプロレタリアート独裁権力を樹立しなければならぬ。このマルクス主義の原則からいって、「占拠」を目的とすることはできない。ましてや「占拠」によって政治危機が生れ人民の決起を呼び起されるなどすることはできない。武装蜂起の諸原則はこうした急進民主主義の戦術観から生れることはいない。